

アー・ヤー・ボヤルスキー編（市原亮平監訳）

『人口学読本，批判的人口学の教程（下）』

玄文社，1977年，4+240ページ

本書はソビエトにおける人口学の教科書の訳書で上下二巻に分かれている。上巻についてはすでに本誌第141号（1977.1）で書評をおこなったが，その後下巻が刊行されたので再びこれを取り上げた。

本巻の上下二巻の構成は，マルクス主義人口学の課題と方法（第1編），人口分析の資料と人口再生産の技術的方法（第2編～第5編），人口現象に与える諸要因（第6編），マルクス主義的人口理論（第7編），および監訳者のあとがき，からなっており，下巻には第5編以降がおさめられている。

まず第5編は，狭義のデモグラフィの中心部分である，人口再生産の計測と人口過程について述べている。人口再生産モデルについて，まず年齢別の出生率と死亡率を連続関数としたモデル（つまりロトカの安定人口理論）を取扱い，次にこれらを離散関数とした行列モデル，そして確率モデルへと展開し，最後に家族の構成や再生産といった人口現象一般をモデル化する考え方が示されている。

第6編では第5編までに取扱った様々な人口現象（変数）の相互関係を扱ったのちに，人口現象とそれに影響を与える経済的，社会的，歴史的要因との関係を，資本主義と社会主義の体制による差，同一体制下における<社会経済グループ>間の差によるものかを検討し，出生率や死亡率の動向が2つの体制間で「外面的な数字は若干似ているにもかかわらず，その内容は異っている（129ページ）」としている。また，法律，宗教などの上部構造および戦争が人口現象にどのような影響をもたらすかをのべ，人口問題および人口分析の方法に関する社会主義的見解が示されている。

第7編は，マルクス主義的人口理論を取上げた部分で，現代の主要な人口問題とは様々なかたちの過剰人口の存在であり，その解決は社会体制の改造にある（213ページ）と結論づけている。

監訳者のあとがきで，ソビエトの人口研究史の本書の位置付けがなされている。そこで原書が刊行された1967年段階では狭義のデモグラフィが中心とならざるをえなかった経過，およびその後人口研究がエンゲルスのいう「生（命）の生産と再生産（224ページ）」の計測からそれに影響を及ぼす要因との関係の分析まで広がっていることが示されている。

しかし，再生産の計測（第14章）において，上巻でふれられたソビエト人口を分析する際に無視することができないと考えられる，結婚や人口移動をも内生変数とした人口再生産モデルが，16～18ページ，30～37ページにおいてきわめて簡単にふれられているにすぎない。また，第14章では式の誤りなど技術的な問題が少なくない。たとえば式(8)～(6)，(15)，(16)，(17)である。文章も十分にこなされたものとはいえず，また前回も指摘したが，本書の用語がこれまでわが国で用いられているものとかかなりの隔りがある。たとえば「再生産（体制）のグロス係数とネット係数（1ページ）」とは，Gross Reproduction Rate（総再生産率—館1960，39ページ）と Net Reproduction Rate（純再生産率—同ページ）のこと，「再生産体制の累進係数（240ページ）」とは安定人口増加率（館1960，710ページ）のことであるらしい。

このことはマルクス主義人口学の立場をブルジョワ人口学と対比させる際に障害とならないのだろうか。また本書とくに第6編で用いられている資料が資本主義社会のものが多く，社会主義社会における<社会経済グループ>間の人口現象が資本主義社会のそれといかにちがったメカニズムをもっている（129ページ）のかを事実をもって証明されることが，マルクス主義人口学の今後の課題ではないだろうか。（伊藤達也）